

【海外留学レポート】

県立広島大学における

ドイツ短期海外研修に参加して

–ドイツ医療福祉施設訪問と現地関係者との暖かいふれあい体験–

Participation in Short-term Training Programs in Germany

by the Prefectural University of Hiroshima:

Visit to Medical and Welfare Facilities in Germany and
Experience of Rapport with Local Medical and Welfare Staff

県立広島大学人間文化学部健康科学科4年 内富 蘭

UCHITOMI Ran

(Department of Health Sciences, Faculty of Human Culture and Science,

Prefectural University of Hiroshima)

キーワード：短期海外研修、ドイツ、県立広島大学

1. はじめに

私は、県立広島大学（以下、本学）の管理栄養士養成課程の学科において、栄養学について学んでいます。この度、2017年2月4日から15日にかけて、本学で2008年以降、毎年行っているドイツ短期海外研修プログラムに参加しました。本研修プログラムは、ドイツの医療福祉施設や社会福祉関係の大学等を訪問し、ドイツの保健医療福祉について学び、現地の関係者の方や学生と意見交換を行うことを目的としています。本年度の参加メンバーは、本学の人間福祉学科の学生、私が所属する健康科学科の学生、本学大学院生、医療福祉関係の方でした。

本研修があることについては、大学1年の時から見聞きしており、その頃から参加を切望していました。3年時に募集が始まった際には、すぐに申し込みをし、選考に通った際の喜びは計り知れませんでした。それほどまでに待ち望んでいたため、現地での1日1日を大切にしたいという思いが大変強く、少しでも多くのことを学び取れるよう、真剣かつ積極的に本研修プログラムに臨みました。

本レポートでは、研修プログラムの内容、研修を通して得た学び、それを通じての自己変容について

て述べていきたいと思えます。私の体験談が、読者の皆様のお役に立てること、また、本体験談を通して、同じような医療福祉の国際交流プログラムが増える契機となれば幸いです。

2. ドイツ短期海外研修プログラムの内容

研修プログラムでは、福祉施設の見学として、アーヘン市（Aachen）ローテ・エアデ特別養護老人ホーム、SKF 幼稚園、アレクシアーナ精神病院、フリードナー病院、ツェレ市（Gelle）のローベーター知的障害者支援施設・特別養護老人ホームの訪問を行いました。施設訪問・調整は、本学との国際学術交流協定校 NRW カトリック大学の関係者が行って下さいました。そして、これらの福祉施設の見学および施設の方との交流を通して、ドイツの医療福祉・社会福祉制度や現場での支援の実際について学びました。また、研修後半の3日間は施設に入所されている知的障害者の方が、就労支援のための職業訓練として働かされているコテージ（小規模なホテル）に宿泊し、宿泊においてもドイツの障害者就労支援の様子を学ぶことができました。日本のなかでは、障害者の方が中心となって勤務されているようなコテージやホテルは聞いたことがないので、とても新鮮でした。併せて、フリードナー専門学校の教員および学生、ローベーター専門学校の学生との意見交換会等も行い、お互いの国の医療福祉制度の違いについて討論を行いました。その他にも、医療福祉施設以外での学びとして、ナイチンゲール博物館、アーヘン工科大学医学部付属病院研究棟、ベルゲン・ベルゼン（元ナチス強制収容所：アンネ・フランク死亡地）メモリアルの見学も行い、ドイツの悲惨な歴史を学ぶことができました。

以上のように、本研修プログラムは、語学の習得や異文化交流を目的とした留学や単なる旅行では訪れる機会のない福祉施設に訪問でき、現地の医療福祉関係の方々との交流し、ドイツの医療福祉の実際を目で見て学ぶことのできる研修となっていました。



写真1. ツェレで宿泊したコテージの外装と内装
（知的障害者の方が職業訓練として働かされている）

3. ドイツの福祉施設を見学して学んだこと

私が、ドイツの福祉施設を見学して特に印象的であったことは、主に3つあります。

1つ目はドイツの医療福祉・社会福祉制度は日本のものと大きく異なるということです。最も大きな違いは、福祉施設の整備・運営が日本は政府が主体となっているのに対し、ドイツではキリスト教会が主体となっているということです。ドイツではキリスト教会が老人ホームや幼稚園、病院など様々な福祉施設を運営しており、1つ1つの施設が孤立しておらず、互いに連携し合い、組織化が十分にされていました。また、ドイツの介護や保育関係の職員の社会的地位は低くなく、職員の不足などの問題も、あまり抱えていないようでした。さらに、日本では近年、待機児童や高齢者の老人ホーム待機者が問題となっていますが、ドイツでは高齢者や児童の施設への入所待機者は少ないようです(ドイツの都市によっては、待機児童はいるようですが)。

2つ目は、ドイツでは施設の利用者の方の自由や嗜好を大変尊重しているということです。ローテ・エアデ特別養護老人ホームでは、高齢者の方は自由に自分の部屋を飾ったり、好きなときに施設外に出かけたりすることができるようになっていました。施設内での日々の生活では、利用者の方がその日にしたいことをすることができ、その時の気分で楽器を奏でたり、絵を描いたりしておられました。訪問したもう1件の老人ホーム、ローベータールの老人ホームでも同様に、利用者の方は重度の認知症でなければ、自由に外出をすることができました。重度の認知症で徘徊の恐れがあり外出ができない方も、施設内は自由に思う存分動き回ることができ、施設内の庭には八の字の小道が設けられ、利用者の方がどこかへ行ってしまわずに歩き続けられる工夫もされていました。また、個人の部屋のベランダごとに小さな花壇があり、利用者の方が、自由に庭いじりできるようにもなっていました。Düren市のSKF幼稚園では、今週何をしたいかを子供たち自身が決め、自分の意志に基づいて絵を描いたり、工作をしたりしていました。アレクシアーナ精神病院では、音楽療法として患者様方が楽しげにギター、オルガン、ドラムなどの楽器で音楽を奏でたり、患者様に合った作業療法に取り組まれたりしていました。音楽療法には実際に私たちも参加させていただき、患者様の皆さんと一緒に楽しく楽器を奏でました。ドイツという異国の地で患者様と一体となって演奏し、音楽の楽しさを共有できた経験には、非常に感慨深いものを感じました。このようなドイツの福祉施設の実際を目にして、日本との違いに非常に驚きました。ドイツの医療福祉施設の利用者の方は、在宅とほとんど変わらない生活で、趣味に時間を費やし、大変楽しそうにされている様子を伺うことができました。また、幼稚園から老人ホームまで訪問見学を行ったことを通して、ドイツには個人の自由と自己決定を尊重する精神が、子供からお年寄りまで、すべての人に根付いているということを実感しました。



写真2. ローテ・エアデ特別養護老人ホームの利用者の方と
(室内は写真や置物などで綺麗に飾られていた)

3つ目は、ドイツの福祉施設はどの施設も地域に開けていて、それが社会福祉の向上に大いに貢献しているということです。日本でも病院や老人ホームで地域住民参加型の夏祭りなどの行事を行っていることもありますが、ドイツの福祉施設ではそれ以上に様々な取り組みを行っていました。例えば、13世紀に修道院によって設立され、680年の歴史を持つアレキシアーナ精神病院では、地域の方を招待した行事（夏祭りなど）を行うのみならず、以前入院されていた方と地域の方とが毎週集まって歌を歌う集会を開いていました。この集会以外にも、在宅に戻った患者さんを地域で支援をしていく体制が整っていました。加えて、地域に開けていることで、精神病に対する理解を住民一人ひとりが持っており、精神病を持った方々も社会に受け入れていく思想が根付いていました。ローベータールの知的障害者支援施設でも、地域の方を招待した祭りや、利用者の方と地域の方が一緒に演劇をするなどのイベントを行っており、地域の方の障害者への理解を得る取り組みを行っていました。また、ドイツの児童養護施設では地域の子供達が自由に遊びに来ることができるようになっており、児童虐待や家庭内暴力など家庭に何か異変があれば、今まで遊びに来ていた子どもが来なくなったり、子ども自身が施設にSOSを伝えたりすることで、すぐに分かるようになっていました。このように、ドイツでは福祉施設が地域に開けていることで、地域に根差した支援を行っていたり、家庭内の問題の早期発見につながっていたりするということを学ぶことができました。

4. 研修への参加を通じての自己変容

本研修を通じて、ドイツの医療福祉制度や現場の実際を知ること、日本の良さあるいは欠点・海外に倣った方がよい点を実感することができ、学び得た良きところを倣っていくために、今後、自分にできることは何か、どのようなアプローチをしていけばよいのかを、日々考えていくきっかけとな

りました。日本国内にいただけでは、それが当たり前、そうあるべきという感覚にとらわれてしまっていたのですが、他国の医療福祉施設を見たことで、より客観的に物事を捉えることができるようになりました。例えば、日本の医療福祉施設で行われている食事の栄養管理は徹底されているのに対し、ドイツでは日本ほど徹底はされておらず、食事はかなり自由があり、バイキング形式で食べたり、欲しいものを買って食べたり等、食事を楽しんでおられました。そのドイツでの様子を知って、日本の病院や福祉施設での与えられたものしか食べてはいけない栄養管理では、栄養面ではよいですが、窮屈感を与え、利用者にとって少しきつく感じる面も一部あるのではないかと思いました。また、福祉制度の面からは、特に、地域に開けたドイツの福祉施設の在り方が、日本で近年増え続け問題となっている児童虐待や精神病院の長期入院患者の件数を改善する切り口となるのではないかと感じました。

さらに、研修を通して、ドイツの歴史や風習、習慣、価値観、国民性、政治問題、難民問題について知ること、自国のみならず、他国の言語・文化・歴史などにも興味を持つようになりました。他国の文化や国民性、歴史を知ること、自分の価値観も変わり、視野の広がりを実感することができたと思います。

その他、研修を経て変わったこととして、留学先で出会った方と英語や簡単なドイツ語でコミュニケーションを取れることの楽しさや嬉しさを実感することができ、英語やドイツ語を今後さらに学んで、よりコミュニケーションがとれるようになりたいと思うようになりました。本研修への参加が決まった半年前から英会話を学んでいたのが大変役に立ち、また、簡単なドイツ語やドイツ語の童謡を覚えていったことで、それらを通して、ドイツの子ども達、障害者や高齢者の方々とお互いに通じ合えることを大変嬉しく思いました。再びドイツへ行くために、ドイツ語の勉強も本格的に始めるようになりました。また、言葉以外でのコミュニケーションもありました。1つは、日本の伝統文化、折り紙です。特技であった折り紙が大変重宝され、鶴、手裏剣、薔薇、ウサギなどを折って渡すと、現地の方に大変喜んでいただくことができました。幼稚園では折り紙を渡した際に、今度来た時には是非、折り方を教えてほしいとお言葉もいただきました。もう1つは、手話でのコミュニケーションです。研修参加者の中に、日本で手話通訳者をされている方がいらっしゃり、偶然にも現地でドイツの手話通訳者の方にお会いする機会がありました。その際に、日本の手話とドイツの手話で同じ言葉を表現し、動きが似ているもの、異なるもの、全く同じものを見つけ合いました（「ドイツ」を表す手話は日本もドイツも共通でした）。お別れの際には、「ありがとう」をドイツ語の手話でお互いに表現し合いました。このようにして、手話を通して気持ちが通じ合えた瞬間に、非常に深い感動を覚えしました。これらのことを通して、話し言葉だけがコミュニケーションではないのだということを再認識でき、そのスキルを身につけていくことの重要性も実感しました。

そして、私は予てより、大学院への進学を希望し、将来的には研究職に就きたいと考えていましたが、本留学経験を通してその思いがより確固たるものとなりました。特に、研修プログラムの中で、

ヨーロッパで一番大きい病院と言われているアーヘン工科大学医学部付属病院を訪れる機会があり、その際の研究棟の見学や、そこへ研究留学されている日本の研究者の先生のお話を通して、研究への興味関心がさらに高まりました。今までは、海外に出ること自体を恐れ、敬遠していましたが、今回の経験を通して、海外で研究を行うこともとても面白いものだと実感し、将来的に機会があれば、是非、海外の大学で研究を行ってみたいと思えるようになりました。



写真3. ローベータールでお世話になった方々と
(後列の現地の方の中にドイツの手話通訳者の方も)

5. おわりに

今回述べさせていただく体験談は以上になりますが、本研修では様々な人との出会いや実際の福祉の現場を見ることを通して、ここには書ききれない程、非常に多くのことを学修することができました。本研修に参加でき、貴重な経験を沢山得ることができたことを、本当に嬉しく思います。

また、短期留学にあたり、本学からの渡航費の一部助成、及び JASSO（日本学生支援機構）からの奨学金を頂き、資金面で大きな助けとなりました。ここに深くお礼申し上げます。

本研修は社会福祉をメインとしているため、専攻ではない分野ではありますが、栄養学を専攻としている私にとっても、ドイツの医療福祉制度や医療福祉施設での栄養管理、食文化などについての学びは、将来、管理栄養士として働くにあたって、大変ためになるものでありました。本学のこのドイツとの保健医療福祉交流プログラムが、今後も大学組織全体で続いていくことを心から願っています。

最後になりましたが、本研修を中心となって企画・運営して頂いた本学の教職員の方々、国際学術交流協定校ドイツ NRW カトリック大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

* 本記事については、本マガジン『留学交流』2月号にも下記の関連記事が掲載されていますの

で、ご参照ください。

【論考】

県立広島大学のドイツ短期海外研修教育効果の検証

-研修参加者への質問紙調査を通して- 県立広島大学保健福祉学部教授 三原 博光

(<http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/02.html>)